九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ミーマーンサー文意論入門 : Vākyārthamātṛkāを理解するために

片岡, 啓
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 准教授

https://doi.org/10.15017/4372033

出版情報：哲學年報. 80, pp.1-30, 2021-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ミーマーンサー文意論入門

── *Vākyārthamātṛkā* を理解するために ── *

片　岡　　啓

1 関連諸論師の年代

クマーリラ（Bhaṭṭa Kumārila）とプラバーカラ（Prabhākara）の対立を基に，ミーマーンサー学派の流れを二分して考えることができる．シャーリカナータ（Śālikanātha）が描くバッタ派（bhāṭṭāḥ）とプラバーカラ派（prābhākarāḥ）の対立である．両者の理論的対立はそれ以前の対立に遡る点に注意する必要がある．プラバーカラは，シャバラ注（*Śābarabhāṣya*）に対して註釈を残すが，シャバラ説（特にその bhāvanā 説）を換骨奪胎して，シャバラが取らない見解 ── 恐らくバヴァダーサ（Bhavadāsa）等に帰すことができるダルマ開顕説（*dharmābhivyaktivāda）[1] ── に基づいてそれを発展させた説を展開する．両説の基本的対立構造は，*Jaiminisūtra* に描かれる，祭祀行為（karman）と果報（phala）をめぐる，ジャイミニ（Jaimini）とバーダリ（Bādari）の理論対立にまで遡る．果報目的説と行為目的説の対立と言うことができる[2]．クマーリラとプラバーカラの対立の核心は，果報を動機とする功利主義に立つ bhāvanā 説と，ヴェーダの命令を絶対とする義務論的な niyoga 説の対立にある．

		Bādari	
	Jaimini		
400		Bhavadāsa	Bhartṛhari
500	Vṛttikāra （=Upavarṣa）		
	Śabara		
		Bhartṛmitra	
600	Kumārila		
		Prabhākara	
	Maṇḍana		
700	Umbeka		
800			
		Śālikanātha	Jayanta
900	Sucarita		
	Vācaspati		
	バッタ派	プラバーカラ派	その他

2 PrP Vam の二部構成

諸語から文意がどのように理解されるのか，という一般理論を説くのがシャーリカナータ著 *Prakaraṇapañcikā* 所収の *Vākyārthamātṛkā* の第一部である（PrP Vam I）．したがって，ここでは，ミーマーンサー特有の祭式構造理解が事前になくとも理解は可能である．いっぽう後半部（PrP Vam II）は，どのようにして apūrva（ヴェーダのみから知られる新しいもの）がヴェーダと世間とに共通する普通の言葉から理解され得るのか —— つまり世間からは知られえないとされる指令が普通の言葉から知られ得る，そして，その語意関係が学習されうるのはどうしてなのか —— を主題とするので，プラバーカラ派に特有の apūrva 説，すなわち，niyoga 説の知識が必要となる．

PrP Vam I:　諸語から文意がどのようにして理解されるのか？

PrP Vam II:　apūrva はどのようにして習得可能か？

本稿では，後半部で扱われる祭祀行為モデル —— バッタ派とプラバーカラ派のそれぞれの説 —— をまず扱った後に，前半部の主題である文意論を見ていく．伝統的な呼び方では JS 1.1.24–26 の「文論題」（Vākyādhikaraṇa）において扱われる主題である．ミーマーンサー初学者のための入門を意図しているので，専門的な議論への深入りや文献証拠の細かい参照は避け，内容理解に資する，ごく一般的な紹介に留める．したがって，本稿は，オリジナリティや新規性を追求する専門論文とは異なる性格のものである．

3 果報目的説の一つとしての bhāvanā 説

3.1 karman（=dhātvartha）からの kriyā（=bhāvanā）の分離

シャバラやクマーリラでは，行為の一般形式である作る働き（kriyā）= 生じさせる働き（bhāvanā）と，実現手段となる祭式を始めとした祭祀行為（karman）= 動詞語根の対象（dhātvartha）とが区別される．分かりやすく言えば，「祭る」=「祭式をする」と言う時の，祭式とスルとを敢えて二つに分けるのである．yāga などの行為名詞によって指される karman が，固まった既成の siddha なものと捉えられるのに対して，定動詞により表示される kriyā はいまだ流動的に実現されつつある sādhyamāna なものと捉えられる[3]．

karman = dhātvartha:	yāga, dāna, homa, etc.
kriyā = bhāvanā:	ākhyāta により表示される

いっぽう文法学派は両者を区別しない．動詞語根の意味 = 行為である．「祭る」であれば，祭式以外にスルの実質内容があるわけではない，と考える．この点で，動詞語根の意味とは別に行為（スル）= 生じさせる働き（ナラセル）を立てるミーマーンサー学派（バッタ派）と鋭く対立する．

なお，本稿では，動詞語根の意味である祭祀行為（karman） —— 祭祀の文脈を離れるならば行為単位とでも訳すべきか —— の典型例である yāga, dāna, homa をそれぞれ，祭式，布施，献供と訳す．祭式や献供は，物体（dravya）・神格（devatā）・行為（kriyā）から構成され，「神格を目指して物体（供物）［の所有権］を放棄する」ものと定義される[4]．

3.2 yajeta の二つのパラフレーズ

「祭るべし」（yajeta）は，最も素直には，「祭式をするべし」（yāgaṃ kuryāt）とパラフレーズ可能である[5]．ここでは祭式（yāga）が行為対象・行為目的（karman=kartrīpsitatama，行為主体によって達せんと最も望まれたもの）とされる．すなわち行為目的説である．

いっぽう，行為そのものが目的ではなく果報が目的であると考えるならば，さらに，「祭式によって（果報を）作るべし」（yāgena［phalaṃ］kuryāt）というように，天界などの果報を行為対象（実現対象 sādhya）として，祭式を行為手段（karaṇa）すなわち実現手段（sādhana）の位置に落とすことになる．果報目的説である．

		行為目的説		果報目的説
yajeta	→	yāgaṃ kuryāt	→	yāgena kuryāt

3.3 二つの系譜

「祭る」（yajati）=「祭式をする」（yāgaṃ karoti）というパラフレーズに留まるのがバーダリの系譜である．ここでは祭式が karman（行為対象・行為目的）となる．祭祀行為（karman）そのものが目的である．「新たなもの」（apūrva）を立てるダルマ開顕説や，指令（niyoga）を立てるプラバーカラ説はこの系譜に属する．

いっぽう，祭式そのものが目的ではなく，天界などの果報が目的であると考えるジャイミニの系譜の場合，「祭る」=「祭式をする」からさらに，「祭式によって（果報を）作る」（yāgena［phalaṃ］karoti）というパラフレーズを行う．シャバラやクマーリラの bhāvanā 論はこの系譜に属す．

	Bādari 系統	Jaimini 系統
yajeta	yāgaṃ kuryāt	yāgena（phalaṃ）kuryāt
	apūrvaṃ kuryāt	yāgena（phalaṃ）bhāvayet
	niyogaṃ kuryāt	

3.4 bhāvanā と三要件

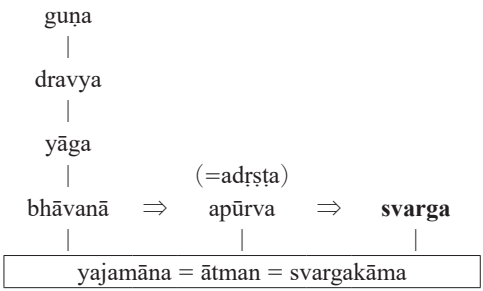
シャバラの bhāvanā 説（JS 2.1.1–4への註釈で主題として扱われる）では，「生

じさせる働き」(bhāvanā) という行為の一般形式 (使役)[6]が祭式に関わる諸要素の核として機能する．すべては究極的に果報 (たとえば天界) を目的とする．たとえば「天界を望む者は祭るべし」(svargakāmo yajeta) は「祭式によって天界を生じさせるべし」(yāgena svargaṃ bhāvayet) と読み替えられる．行為の一般形式である bhāvanā は,「何を ?」(kim)「何によって ?」(kena)「どのように ?」(katham) というように，実現対象 (sādhya)・実現手段 (sādhana)・執行細目 (itikartavyatā) という三要件 (aṃśatraya) を要求する．例えば，願望祭である新月満月祭 (darśapūrṇamāsau) ── 新月日に3，満月日に3の合計6つの主祭群から構成される ── では，天界が実現対象，祭式 (例えば新月満月祭などの主祭 pradhānakarman) が実現手段，前祭等 (prayājādi) の従属祭が執行細目となる[7].

bhāvanā	bhāvayet	
sādhya	kim?	svargam
sādhana	kena?	yāgena
itikartavyatā	katham?	prayājādinā

3.5 karman, dravya, guṇa, saṃskāra, etc.

実現手段である祭祀行為 (karman)，例えば yaj 等の動詞語根の対象 (dhātvartha) である祭式 (yāga) は，米／大麦 (から作られた祭餅 puroḍāśa) という物体 (dravya)，さらに，物体は特定の数 (saṃkhyā) などの性質 (guṇa) ── ここでの guṇa は「従属要素」という意味の guṇa (後述) ではなくヴァイシェーシカで言うところの性質のことである ── や，物体に従属する行為である準備行為 (saṃskāra) に限定される[8].



3.6 apūrva

祭式行為はその場で滅するため，天界との因果関係の媒介項として未見対象（adṛṣṭa）としての新得力（apūrva）が論理的要請（arthāpatti）により想定される．この apūrva は，シャバラより以前の「ダルマ開顕説」においては，「新たなもの」として，ヴェーダから開示される永遠のダルマのことを指していたはずであるが，シャバラはその apūrva を換骨奪胎して，JS 2.1.5への註釈の中で，媒介項としての地位に貶めている[9]．したがって，同じ apūrva でも，JS 2.1.5への註釈で扱われる apūrva について，（シャバラも含めて）バッタ派では「新得力」（論理的要請により想定される未見対象），プラバーカラ派（およびその系譜の先駆けとなるダルマ開顕説）では「新たなもの」（ヴェーダ命令から新たに知られるもの）として訳し分ける必要がある[10]．

また，新月満月祭における六つの主祭と，前祭・後祭などの従属祭など，時間的に幅のある祭祀行為を一つの果報の下に統合するため，新得力にも主従の階層が立てられ，順次，統合される[11]．

3.7 実現対象・実現手段の関係

一つの文（vākya）により，要素 A と要素 B の間にある実現対象・実現手段の関係（sādhyasādhanabhāva）が新たに規定される（vidhīyate）．「米で祭るべし」ならば，米によって祭式が実現されるべきであるという両者の関係（米⇒祭式）が知らしめられる．祭式を目指して米が規定される．（あるいは，祭式と米の間の実現対象・実現手段の関係が規定されると言ってもよい．）

“vrīhibhir” → vrīhi
|
“yajeta” → yāga

この場合，「祭るのは（既知情報），米によって（未知情報）」というように，既知と未知とが区別される[12]．

3.8 既知と未知

一文は，既知情報の提示部と，未知情報の規定部との二つの部分に分析される．既知情報は，prāpta（既出），jñāta（既知），uddeśya（提示対象），anuvādya（再言対象）などと呼ばれる．いっぽう未知情報は，aprāpta（未出），ajñāta（未知），upādeya（用いられるべき対象），vidheya（規定対象）などと呼ばれる．

規定部（vidhi） → 新（aprāpta）・従（guṇa）
|
提示部（uddeśa） → 旧（prāpta）・主（pradhāna）

3.9 主従関係

「米で祭る」という語の連なりを，「祭るのは米によって」というように，既知・未知の情報の方向性まで分析した上で，文の深層構造までもが明らかとなった一文を「言明個体」（vacanavyakti）と呼ぶ．言明の真の姿という意味である．

諸要素の階層構造は主従関係と捉えられる[13]．主要素は，pradhāna（主要素），śeṣin（中心要素），aṅgin（構成本体），いっぽう，従属要素は guṇa（従属要素），śeṣa（附属要素），aṅga（構成要素）などと呼ばれる．「米で祭るべし」などの規定文によって，主に対して従を配属する操作を viniyoga と呼ぶ．また，古い用語法では，上位要素を para（上位のもの）と呼ぶ．「それを主眼とすること」（tatparatva = tātparya）にその名残が見られる．

guṇa	śeṣa	aṅga
|	|	|
pradhāna	śeṣin	aṅgin

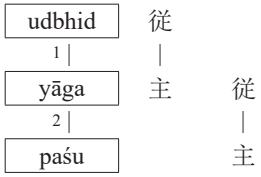
3.10 一文性の原則

一文（ekavākya）は原則として一つの主従関係しか知らせない．（例外的に多数の関係を知らしめることが可能な場合もある．）多数の関係が同時に知らしめられる場合には，通常，一文が分裂（vākyabheda）してしまう．したがって，祭名と解釈するなどの解釈テクニック（nyāya，解釈原則）によって文分裂が回

避される．例えば，udbhidā yajeta paśukāmaḥ は，「ウドビド［という道具］によって，祭るべし，家畜を望む者は」（ウドビド→祭式→家畜）と（誤って）解釈されると，文分裂を引き起こしてしまう．この場合，「ウドビド→祭式」と「祭式→家畜」という二つの主従関係が規定されることになるからである[14].

udbhid
|
yāga
|
bhāvanā ⇒ apūrva ⇒ paśu

この（誤った）解釈を「言明の真の姿」に即して見ると，祭式という同一要素は，ウドビドに対して主，いっぽう，家畜に対しては従となる．したがって，一文において，祭式が矛盾した二つの性格を担ってしまうことになる．文分裂を招くこのような解釈は斥けられるというのが定説である．つまり，文分裂を招く以上の（原文に即して一見素直とも思われた）解釈は誤った解釈である．



したがって，定説においては，ウドビドを祭名と解釈することで，「ウドビド［という］祭式によって家畜を望む者は祭るべし」（さらに「ウドビド祭によって家畜を生じさせるべし」）と解釈される（ウドビド祭→家畜）．このようにして一文性が保たれる．

udbhid=yāga
|
paśu

3.11 文意としての関係・連関

その意味で，一文が知らしめる未知情報の核心は，主従の関係（saṃbandha），さらに厳密に言うならば，主従の方向性を持った連関（anvaya「従い行く」）であると言ってよい[15].

vākya → guṇa
| anvaya
pradhāna

4 クマーリラの abhidhābhāvanā 説

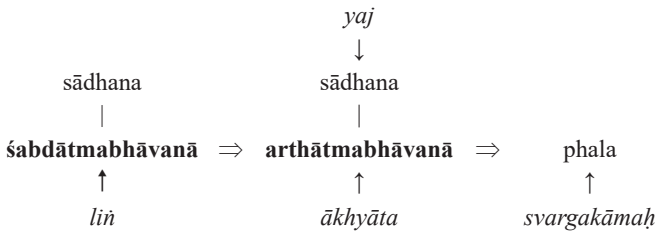
4.1 行為と命令の使役構造

シャバラが導入した bhāvanā 説は，クマーリラによって更に発展させられる．クマーリラは，「する」（ākhyāta，定動詞）が表示する行為の使役構造（例：祭式によって天界を生じさせる働き）だけでなく，「べし」（liṅ，願望法動詞語尾）等が表す命令（vidhi）の使役構造も考えた[16]．すなわち，祭主が天界を生じさせる働きを応用して，ヴェーダが祭主を行為させる使役構造も考えた[17]．（シャバラが命令論を論じることはない．）

「する」 → kriyā = ［ārthī］ bhāvanā
「べし」 → vidhi = ［śābdī］ bhāvanā

4.2 二つの bhāvanā

クマーリラは，旧来の「生じさせる働き」（bhāvanā）を「対象を本体とする生じさせる働き」（arthātmabhāvanā）と呼んだ上で，それとは別に，使役構造を取るヴェーダの命令を，「言葉を本体とする生じさせる働き」（śabdātmabhāvanā）と呼ぶ．後者は「表示［者］の生じさせる働き」（abhidhābhāvanā）とも呼ばれる[18]．後代には，両者を，ārthī bhāvanā と śābdī bhāvanā とも表現する[19].



5 マンダナによる軌道修正

5.1 liṅādi の意味対象としての iṣṭasādhanatā

マンダナはクマーリラの二重 bhāvanā 説 ── bhāvanā のツインタワー説 ── を批判し，「べし」の意味対象である命令（vidhi）の実質的内容を，実現対象と実現手段の関係，すなわち，iṣṭasādhanatā（望まれたものの実現手段であること）にあるとした．こうしてマンダナは，bhāvanā のモデルとしては，クマーリラの二重 bhāvanā 説から，シャバラのシンプルな bhāvanā 説に戻る．彼は，ārthī bhāvanā については，*Bhāvanāviveka*（BhV）で，いっぽう，śābdī bhāvanā については *Vidhiviveka*（VV）で取り扱う．

Bhāvanāviveka	ārthī bhāvanā
Vidhiviveka	śābdī bhāvanā

5.2 マンダナの功利主義的人間観

これによりマンダナは果報目的説を徹底するとともに，「べし」が表す指令を重視するプラバーカラの義務論的な見方を批判する．すなわち，人間を無理やりに動かす絶対命令の要素を徹底的に排除し，「べし」が表すのは，功利的な，人に役立つ情報に過ぎないとする．人は己が目指す目的の実現手段・執行細目をヴェーダから知ることで自ら行動を起こすのであって，ヴェーダ命令に義務的・盲目的に従うわけではない．

5.3「べし」の対象としての実現対象・実現手段の関係

このようにして，マンダナは，果報目的説が本来目指していた功利主義を徹

底して，クマーリラの中途半端な命令論 ── 「べし」が人を促す働きを表示するとする ── を退ける．すなわち，マンダナによれば，人を突き動かすのは，実現対象と実現手段の関係に過ぎず，それを知ることで人間が主体的・能動的に行動を開始する．マンダナによれば，「べし」が表すのは，対象世界にある（人間に役立つ，そして，ヴェーダだけが知らせ得る）因果関係に過ぎない．「お得情報」こそ，ヴェーダ聖典の知らせる内容の核であり，命令が（風が人を煽るように）無理やりに人を突き動かすわけではないし，また，プラバーカラの言うような，人を内から突き動かす「すべし」という衝動的な指令が，ヴェーダ命令（願望法動詞語尾等）により理解させられるわけでもない．

「祭る」 → 祭式
「べし」 → |
「天界を望む者は」 → 天界

6 行為目的説の一つとしての niyoga 説

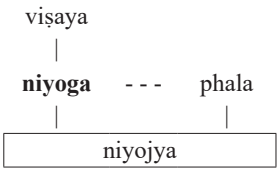
6.1 niyoga ＝ apūrva ＝ kārya

プラバーカラにおいては，生じさせる働き（bhāvanā）ではなく指令（niyoga）が諸要素の核となる．指令は，ヴェーダ聖典の命令以外からは知られないという意味で（認識論的に・情報価値として）新しいもの（apūrva，以前にないもの）である．また，（行為論の観点から見た場合）それ自体が為されるべきもの（kārya）である．すなわち，実現されるべきものとして最上位に立つものである[20]．

niyoga ＝ apūrva ＝ kārya

6.2 文意（最上位の被限定対象）としての指令

プラバーカラ説では，為されるべき最上位の要素は，果報ではなく指令それ自体である．「天界を望む者は祭るべし」の特に「べし」（liṅ）から，「すべきだ」（kartavya）を内容とする閃きが聞き手に生じ，そこからさらに，「天界を望む者」という指令される者（niyojya），および，指令の対象（viṣaya）として祭式が理解され，両者が指令に従属的に連関していく．

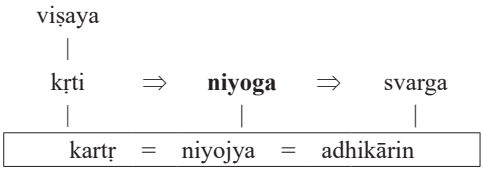


6.3 指令と果報

プラバーカラでは，結果的に祭主に天界（その本質は喜悦 prīti である）が生じることになるのを否定しないが，それが行為の動機となるわけではない．（それを認めてしまうと，果報目的説に堕してしまうから，果報が指令よりも上位に来ることは注意深く回避される．）行為の動機となるのは，あくまでも，「べし」が表示する指令である．また，「べし」が理解させる指令は（マンダナによるプラバーカラ説の記述から分かるように）三時を超越した存在である．指令と果報の因果関係（実現手段・実現対象の関係）は，指令よりも果報が上位に来るのを回避しながら，慎重に扱われる．主人（niyoga という主）が召使い（niyojya である従）に報酬を与えるようなものであって，その主従関係が揺らぐことはない．「X のため」という主従関係の最上位には常に指令が位置するのであって，果報ではない．

7 シャーリカナータのモデル

シャーリカナータ説はプラバーカラのモデル（niyoga を核として niyojya と viṣaya とがそこに関係していく）に基づくものの，クマーリラの bhāvanā（= 人の意志的努力 prayatna）を取り込むために，kṛti（意志的努力）を導入する（PrP 256, 10–11）．結果として，見た目は，クマーリラの arthātmabhāvanā に近いモデルとなる．



ただし，核となるのが bhāvanā（シャーリカナータ言うところの kṛti）ではなく niyoga であることに変わりはない．結果的にモデルがクマーリラに相似することは，文意論のモデル —— クマーリラの文意理解の二段階説に近づいている —— でも見られた現象である．シャーリカナータは，相手からの批判をかわすために，相手のいいところを取り入れて，「それについては他説でも自説でも同様である（ので自説への批判は不可能である）」という手法を用いているのである．

8 言葉と対象

8.1 直接表示

文意論の前提として，まず，言葉（śabda）が対象（artha）を［直接に］表示する（vac, abhidhā）というのが基本構造となる[21]．

śabda → artha

8.2 間接指示

何かが言葉の意味対象から間接的に理解される場合，その過程は間接指示（lakṣaṇā）となる．例えば，シャバラやクマーリラが論じるように，「牛」という語が直接に表示するのは牛性という普遍であって，特定の牛という個物（vyakti）は，牛性から間接的に理解されるので，その意味で，言葉の対象ではない．

“gauḥ” → gotva（sāmānya）
|
govyakti（viśeṣa）

8.3 śābda と ārtha

間接指示対象（lakṣya）は，意味から理解されるものという趣旨で，ārtha と呼ばれる場合もある．逆に，言葉から直接に理解されるものは，śābda と呼ばれることもある．

śabda → śābda/śabdārtha → ārtha
vācya/abhidheya lakṣya

8.4 直接と間接

ミーマーンサーの解釈原則の運用にあたっては，直接と間接という対比は重要である．「A–B–C」という三項において，AB と AC の距離・懸隔（viprakarṣa）の遠近という観点から，その結び付きの強弱が計測される．すなわち，距離が近いほど関係は強く，距離が遠いほど関係は弱くなる．したがって，AB の直接関係と AC の間接関係が矛盾する場合には，AB の直接関係が優先される．「離れているから」（viprakarṣāt）というのが AC が棄却される根拠となる．語（例えば「牛」）の意味対象が個物（vyakti, viśeṣa）ではなく普遍（sāmānya, jāti, ākṛti）とされる背景にも，この発想がある．

8.5 sāmānya と viśeṣa

なお，文から理解される対象（文意）は，（様々な限定要素により構造的に限定を受けた被限定要素である）個物である以上，クマーリラにとっては，間接指示対象である．このことは彼の散逸した *Bṛhaṭṭīkā* において明言される[22]．シャバラは，語意を sāmānya（一般者，共通性），文意を viśeṣa（特殊）として，両者の違いを明確化する[23]．

9 言葉の三分類

短長により言葉に三つを区別できる．音素（varṇa），語（pada），文（vākya）である．この三つが基本的な単位となる[24]．

varṇa: g, au, ḥ
pada: gauḥ
vākya: gām ānaya

10 語意と文意

言葉と対象との対応の図式を敷衍して常識的に考えると，語と文とに対応し

て，それぞれ，語意と文意とがあることになる．

śabda		artha
varṇa	→	φ
pada	→	padārtha
vākya	→	vākyārtha

11 聖典解釈学と文法学

11.1 ミーマーンサーの音素説 : 音素の集合 ＝ 語

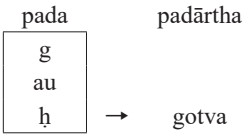
ヴァイシェーシカと同じく部分から全体が構成されるとし，全体の実在性を認めるものの，全体を構成する部分の実在性を重視する聖典解釈学ミーマーンサーでは，要素還元主義を取るので，文は語から構成され，さらに，語は音素から構成されると考える．したがって，語意理解は音素から説明されることになる[25]．語は音素の集合である．したがって，語意（例えば牛性）を理解させるのは，シャバラが言うように，「先行諸音素から生じた準備効果を伴った最終音素が［語意を］理解させるものである」（pūrvavarṇajanitasaṃskārasahito ’ntyo varṇaḥ pratyāyakaḥ）ということになる[26]．

varṇa		padārtha
g		
|		
au		
|		
ḥ	→	gotva

11.2 語が語意を理解させる

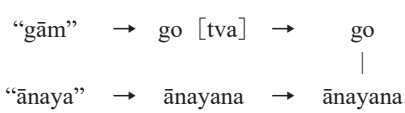
したがって，「語が語意を理解させる」というのは，聖典解釈学では本当は正確な言い方ではない．語スポータという無分割の単位としての語を認めているわけではないからである．しかし，語意理解に関する上の定説が確立された後の実際の説明では，語が語意を理解させるという常識的な図式を用いて説明がなされる．その意味で，文意に関して，ミーマーンサーは語を原因とする「語論者」で

あり，いっぽう，バルトリハリは無部分の文を原因とする「文論者」である．



12 バッタ派の「表示されたものの連関」（abhihitānvaya）説

音素よりなる語から語意を経て文意が理解されるというのがシャバラおよびクマーリラ（そして彼に従うバッタ派）の定説である．すなわち，「牛を」から牛性が理解され，「連れてこい」から連行が理解される．そして，牛と連行の連関（anvaya），あるいは，牛に限定された（viśiṣṭa）連行が文意として理解される[27]．

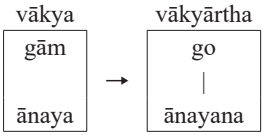


なお，特殊な文脈を除けば，表示対象が牛性であって牛の個物でないという語意論の定説について，文意論の範囲内で，そこまで神経質になる必要はない．通常，文意論の文脈においては，さほど意識されない．（例えば，連行が，連行一般であることが強調されることは通常はない．）音素と語の場合と同様である．いったん定説において確立した微細な主張は，その箇所では細かく論じられるが，他箇所では既に確立済みのこととして，ラフな表現 —— つまりもう少し日常的な表現 —— が好まれるのが普通である．あまり杓子定規に定説に凝り固まって厳密に全てを解釈しようとするのは，バランスを欠いた姿勢である．ミーマーンサー文献を読む際に留意すべき点である．

13 文法学者バルトリハリの「無部分の文」説

部分の実在性を認めず，それを仮構とするバルトリハリは，文が直接に文意を理解させるとする．語や語意という部分的な単位は仮構的存在に過ぎない．

（最終的な全体は語ブラフマンとなる．）無部分の文から，聞き手に閃き（pratibhā）が生じる．部分に還元されることのないこの全体的・統合的な閃きが文意である．なお誤解を招きやすいので注意すべきは，閃きという認識の対象が文意なのではなく，閃きそのものが文意である．全体直観が文の対象である．



14 プラバーカラの「連関したものの表示」（anvitābhidhāna）説

14.1 vyutpatti: 語意関係の習得

語の意味に対する適用・使用（prayoga）は，語意関係の習得（vyutpatti）という先行学習を必要とする．

“gauḥ” → gotva >>> “gauḥ” → gotva

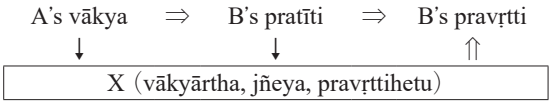
vyutpatti 学習段階　　prayoga 使用段階

14.2 vṛddhavyavahāra: 年長者達の言語を介したやりとり

実際に使用される言葉が文（vākya）という単位であることは衆目の一致するところである．単語（pada）を単独で用いる人はいないからである．（「ドアを」という単語を単独で用いる場合でも，「閉めろ」などの動詞が省略されていると考えられる．）したがって，語意習得（vyutpatti）においても，語意関係を学ぶ幼児が把握するのは，文という単位が基本となるはずである．

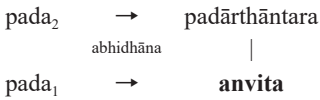
場面としては，A と B という年長者2人が言葉を介してやりとりしている ── A が B に命令している ── 場面を，言語習得中の C という幼児が目撃する．「牛を連れて来い」などの言葉を A が発することで，B が実際に，牛を連れて来る行動を起こす．幼児 C は，A が発した言葉により，B が X を理解し，それが B の行動開始の原因となったと考える．そして，その X を，A が発した言葉

の意味対象（文意）であると確定する．プラバーカラ派では，命令文 ── 特に「べし」 ── の対象であるこの X を指令（niyoga）と考える．指令を理解することで人は行動を起こすからである．また，各語の意味は，語の挿入（āvāpa）・削除（udvāpa/uddhāra）によって，語を入れ替えることで生じる理解・行動の違いを観察することで抽出される．



14.3 文意としての anvita

プラバーカラの卓見は，「牛」という語の対象が，シャバラやクマーリラの考えたような牛性という抽出された普遍 ── 語のレベルの単位 ── ではなく，何らかのものと既に連関済みの牛 ── 文レベルの単位 ── であるということを，習得の場に立ち戻って考えたことにある．すなわち，語 A は，語 B の意味と連関済みのもの（anvita）を表示する（abhidhāna）．



14.4 文意理解の二段階と一段階

すなわち，「語→語意（普遍）→文意（特殊）」というシャバラ・クマーリラの二段階ではなく，「語→連関したもの（文意）」という一段階で文意が理解されると考えた．これにより，語という要素を実在としながらも，文意を一気に理解するというプロセスを主張することが可能になる．この意味で，「文→文意」という一段階を唱えるバルトリハリ説と，二段階説を唱えるクマーリラ説（= シャバラ説）の間を行く説と位置付けることができる．実際，プラバーカラの記述は，バルトリハリとシャバラ（恐らくクマーリラの理解したシャバラ）を意識したものとなっている．

Bhartṛhari:	vākya	→	vākyārtha		
Prabhākara:	pada	→	anvita		
Śabara/Kumārila:	pada	→	sāmānya	→	viśeṣa

15 シャーリカナータの課題

シャーリカナータが Vam I と Vam II において発展的に論じる諸問題については，それぞれ，片岡 2019と Kataoka 2020a で論じた.

16 聖典解釈学文献の構造と関係

16.1 JS の構成

JS 1.1.1の数字は，それぞれ，adhyāya（課），pāda（節・篇），sūtra（経）の番号を表す．パーダは，クォーター（四分の一），あるいは，課によっては八分の一である．JS 1.1.(1).1と記す場合の括弧は adhikaraṇa を表す[28]．全12課の構成は以下のようになっている（片岡 2011a: 6）.

1–6. 基本教示（upadeśa）
  1. ［ダルマの］認識手段（pramāṇa）
  2. 異なる祭祀行為を知るための六つの判断根拠（nānākarmalakṣaṇa）
  3. 附属要素配属のための六つの判断根拠（śeṣaviniyogalakṣaṇa）
  4. 儀式を目的とするものと人を目的とするもの（kratvartha/puruṣārtha）
  5. 順序制限のための六つの判断根拠（kramaniyamalakṣaṇa）
  6. 資格（adhikāra）
7–12. 拡大適用（atideśa）
  7. 一般的拡大適用の判断根拠（sāmānyātideśalakṣaṇa）
  8. 特定的拡大適用の判断根拠（viśeṣātideśalakṣaṇa）
  9. ［マントラ等の］部分変更の判断根拠（ūhalakṣaṇa）
  10. 取り消しと付け加えの判断根拠（bādhābhyuccayalakṣaṇa）
  11. 同時多効果要素と個別効果要素の判断根拠（tantrāvāpalakṣaṇa）
  12. 附随効果要素の判断根拠（prasaṅgalakṣaṇa）

16.2 Tarkapāda の詳細

Tarkapāda（思弁篇） ── クマーリラの *Ślokavārttika* の章立てに基づく ── について詳しく見た表は以下である（Kataoka 2011b: I xix–xx）[29].

Adhyāya 1–6: upadeśa

1 pramāṇa

1.1 vidhi（=**Tarkapāda**）

1.1.(1).1 pratijñā

1.1.(2).2 codanā

1.1.(3).3 nimitta

1.1.(4).4 pratyakṣa

1.1.(5).5 autpattika

1.1.3 vṛttikāragrantha

1.1.4a nirālambana, śūnya, anumāna, śabda, upamāna, arthāpatti, abhāva

1.1.4b citrākṣepa

1.1.5 saṃbandhākṣepa, sphoṭa, ākṛti, apoha, vana, saṃbandhākṣepa-parihāra, citrākṣepaparihāra, ātman

1.1.(6).6–23 śabdanityatā

1.1.(7).24–26 vākya

1.1.(8).27–32 vedāpauruṣeyatva

1.2 arthavāda

1.3 smṛti/ācāra

1.4 nāmadheya

2 nānākarmalakṣaṇa

3 śeṣaviniyogalakṣaṇa（8 pādas）

4 kratvartha/puruṣārtha

5 kramaniyamalakṣaṇa

6 adhikāra（8 pādas）

Adhyāya 7–12: atideśa

7 sāmānyātideśalakṣaṇa

8　viśeṣātideśalakṣaṇa

9　ūhalakṣaṇa

10　bādhābhyuccayalakṣaṇa（8 pādas）

11　tantrāvāpalakṣaṇa

12　prasaṅgalakṣaṇa

16.3 Kumārila の三著作

スートラに対するクマーリラの三著作の配当は，以下のようになる（片岡 2011a: 102）.

テクスト	註釈先	形態
Ślokavārttika	1.1.1–32	韻文
Tantravārttika	1.2.1–3.8.44	韻文と散文
Ṭupṭīkā	4.1.1–12.4.47	散文

16.4 *Bṛhatī, Ṛjuvimalā*

PrP Vam は独立の著作であって，JS への注釈書の類ではない．その意味で，同じく文意論を扱う Vācaspati の *Tattvabindu*（TB）や，Pārthasārathi 著 *Nyāyaratnamālā*（NRM）所収の Vākyārthanirṇaya と同類である．しかし，対応としては，JS 1.1.24–26の Vākyādhikaraṇa（文論題）に準拠する．したがって，シャバラ注[30]への註釈であるプラバーカラの *Bṛhatī*（写本の現存する6.2までが既刊），および，その *Bṛhatī* に対する註釈であるシャーリカナータの *Ṛjuvimalā*（Ṛju）に内容的に対応する箇所が散見される．文論題に対する両派の註釈をまとめておく．（ただしウンベーカ注の「文論題」箇所は失われている[31]．またスチャリタ注の文論題箇所は写本は現存するが未出版である．）

1	*Jaiminisūtra*	
2	*Śābarabhāṣya*	
3	Kumārila's *Ślokavārttika*	Prabhākara's *Bṛhatī*

4	Umbeka's *Tātparyaṭīkā* Sucarita's *Kāśikā* Pārthasārathi's *Nyāyaratnākara*	Śālikanātha's *Ṛjuvimalā*

16.5 独立作品 Maṇḍana 著 *Vidhiviveka* ほか

Maṇḍana の *Bhāvanāviveka*（BhV）と *Vidhiviveka*（VV）は，タイトルの通り，bhāvanā と vidhi とを扱う独立作品である．後者はクマーリラとプラバーカラの命令論を批判したものであり，Vam におけるシャーリカナータによる再批判もマンダナの著作を念頭に置いている．シャーリカナータの Vam を理解するためには，前史として，バルトリハリの *Vākyapadīya*（VP），シャバラ注（ŚBh），クマーリラ注（ŚV），プラバーカラ注（Bṛh），マンダナの BhV と VV を念頭に置く必要がある．（また，シャーリカナータのクマーリラ理解は，ウンベーカ注（ŚVTṬ）に依拠していたはずであるが，残念ながら，当該箇所散逸のため，確認不可能である．）シャーリカナータ以降としては，ŚV へのスチャリタによる註釈である *Kāśikā*（ŚVK），ヴァーチャスパティの文意論である *Tattvabindu*（TB），パールタサーラティによる註釈である *Nyāyaratnākara*（NRĀ）および独立作品である NRM の Vidhinirṇaya と Vākyārthanirṇaya 章が参考になる．

Bhartṛhari	VP
Śabara	ŚBh ad 1.1.24–26
Kumārila	ŚV ad 1.1.24–26
Prabhākara	Bṛh ad 1.1.24–26
Maṇḍana	BhV, VV
（Umbeka	ŚVTṬ ad 1.1.24–26）
Śālikanātha	PrP Vam
	Ṛju ad 1.1.24–26
Sucarita	ŚVK ad 1.1.24–26
Vācaspati	TB
Pārthasārathi	NRĀ ad 1.1.24–26
	NRM

17 聖典解釈学入門文献案内

17.1 *Arthasaṃgraha*

Tarkapāda を除いた JS 1.2（第 1adhyāya の第 2pāda）以降で展開される聖典解釈学に入門するための綱要書が後代，数多く著されている．標準的な教科書としてよく用いられるのが，*Arthasaṃgraha* である．英訳と詳しい解説のついた Gejendragadkar と Karmarkar の共著（AS（G））が推奨される．サンスクリット注に慣れている場合は，Paṭṭābhirāma Śāstrī のサンスクリット注を付した版（AS（P））が推奨される[32].

17.2 *Mīmāṃsānyāyaprakāśa*

AS の学習が終われば，AS が準拠する *Mīmāṃsānyāyaprakāśa*（MNP）に移行すべきである．種々の版が出ているが，現代ミーマーンサー研究の祖と見なすべき Cinnasvāmī Śāstrī の版を用いるべきである．シンプルな英訳として，Edgerton の英訳が参照されることが多いが，内容的に裨益されることは少ない．英訳に拘泥する暇があれば，Cinnasvāmī が付したサンスクリット注を熟読すべきである．MNP の Abhyankar 注は無関係の不要な事項の挿入が多く推奨しない．

17.3 *Mīmāṃsāparibhāṣā*

サンスクリットをダイレクトに読む力があるのならば，綱要書としては，*Mīmāṃsāparibhāṣā* が最も簡便にまとめてくれている．AS と MNP で基礎を固めた後は，MP で今一度知識を整理するとよい．AS での G 本に相当するような信頼すべき英訳もなく，また，批判校訂版が出ている訳でもないので，インドから教科書として数多く出ているどの版を用いても大同小異である．

17.4 論題の参照方法

ミーマーンサー特有の用語については，ミーマーンサー用語辞典である *Mīmāṃsākoṣa* が助けとなる．特定の用語に関係する文献諸例を集めたものである．論題の内容を手っ取り早く知りたい場合は，Benson による *Mīmāṃsānyāya-saṃgraha* の校訂・英訳が助けとなる．最も見通しの良い後代の論題理解を参照したい場合は，*Kutūharavṛtti* がお勧めである．論題に準拠した諸本は幾つか存

在するが，スートラそのものを簡便に解説する著作は少ない．スートラの内容を素早く参照したい場合は，*Jaiminisūtravṛtti* が助けとなる．いずれにせよ，スートラに遡って考える場合は，*Śābarabhāṣya* をダイレクトに参照せざるを得ない．全訳として G. Jha の英訳，未完の部分訳（1.1–9.4）に Yudhiṣṭhira Mīmāṃsaka のヒンディー訳がある．シャバラ注の諸版については，片岡 2004 を参照．Ānandāśrama の初版（第二版とは頁数が異なることに注意）が最も便利である．

17.5 ミーマーンサーの言語理論

シャバラ注の各論題の論点を，特に語意論や文意論などの言語理論を中心に，整理・配置し直したものとして，Devasthali 1959がある．Index がないため，スートラ番号が分かっている場合に，参照箇所を探すのに苦労する —— 脚注に付された参照文献のスートラ番号から探すしかない —— が，良書であり，ミーマーンサーの文意論を理解するための入門書となる．ミーマーンサーに限らず広くインドの意味論を扱った良書としては，K. Kunjunni Raja の *Indian Theories of Meaning* が有名であり頻繁に参照される．最新刊では，Alessandro Graheli の編になるインドの言語哲学の論文集が諸学派の理論（音素論・語意論・文意論など）を俯瞰するのに便利である．*Vākyārthamātṛkā* に関しては，Saxena 2018の文献表にある関連文献を参照されたい．

---

* 本稿は，2020年9月14日～18日に京都大学文学部・文学研究科で行われた筆者の集中講義に際して準備した資料を基にしている．本研究は JSPS 科研費20K00056の助成を受けたものである．

1 片岡 1999，Kataoka 2000，片岡 2011a 参照．

2 片岡 2011a 参照．

3 bhāvanā の表示部位に関しては，片岡 2004: 172以下を参照．

4 Cf. JS 4.2.27–28; ŚBh ad 4.2.28: yajatir devatām uddiśyotsargamātram, juhotir āsecanādhikaḥ, dadātir utsargapūrvakaḥ parasvatvena saṃbandhaḥ.「祭式とは神格を目指しての放棄一般，献供は［それに］注入が加わったもの，布施は［自身の所有権の］放棄を前提として［物体を］他者の所有権と結び付けること．」

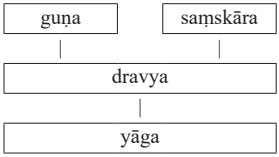
5 文分析におけるパラフレーズの働きについて詳しくは Cardona 1975を参照．

6 bhāvanā の使役構造については，片岡 1995, 2011a を参照．

7 Cf. AS（G）94.

8 祭式は「物体・神格・行為」（JS 4.2.27）という定義から分かるように，物体・神格と一体

的に構成される．しかし祭式分析において，物体という実体は，ヴァイシェーシカの存在論に沿って，祭式という行為から別立てして捉えられる．そして，物体の限定要素として性質（guṇa）や準備行為（saṃskāra）がさらに上に載るイメージとなる．



ただし，聖典規定から解釈学的に dravya の限定要素として guṇa を導くのは一筋縄ではいかない．それについては Aruṇādhikaraṇa で議論される．詳しくは Cardona 2017を参照．いっぽう神格については，通常，祭式と一体のものとしてイメージされる．また，規定部である brāhmaṇa 部と並ぶヴェーダの一部である mantra の果たす役割については，祭式および祭式構成要素を思い起こさせること（prakāśana，照らし出すこと）とすることで，未見目的をできるだけ減らす方向で解決が図られる．マントラ論題について詳しくは，針貝 1990を参照．

9 ただし，シャバラは，旧来の用例にしたがって apūrva を「新たな」という形容詞として用いる場合もあるので注意が必要である．

10 シャバラが JS 2.1.5への註釈で扱う apūrva が想定対象であることについては，片岡 1998を参照．

11 apūrva の階層構造の詳細については，AS（G）170の解説を参照．

12 聖典解釈学における既知・未知の対立については，片岡 1996を参照．

13 時に重軽という視点も入る．主従（それは基体 dharmin と属性 dharma の関係に置換可能）のいずれかを犠牲にしなければならない場合，犠牲にしても（解釈学的な観点から）傷が軽いのは従属要素であるが，それは「軽い」からである．Kataoka 2011b: 249, n. 204参照．

14 シャーリカナータも簡潔にウドビド論題に言及する（PrP 255, 8–14）．

15 ただし anvaya を saṃbandha と同義的に，主従の方向性を意識せずに使う場合もある．

16 vidhi という語は，命令言明や命令文という言葉（すなわち命令行為の手段）を指す場合もあれば，その意味対象である命令行為を指す場合のいずれもある．通常，命令論においては，言葉としての命令を liṅādi（願望法動詞語尾等），その意味対象を vidhi と総称することが多い．

言葉としての「べし」　　意味対象としての命令
liṅādi　→　vidhi

17 したがって，命令という使役作用，実現対象・実現手段・執行細目という三要件を期待することになる．対象を本体とする生じさせる働き（arthātmabhāvanā），命令の理解（vidhijñāna），称賛（prāśastya）が対応する．Cf. AS（G）93.

18 なお，マンダナは，abhidhā-bhāvanā という合成語を tatpuruṣa だけでなく，karma-dhāraya で解釈する可能性も考慮している．その場合，表示作用がそのまま使役作用，という解釈となる．

19 クマーリラの bhāvanā 説については，Kataoka 2001，片岡 2011a を参照．

20 プラバーカラ説の背景として，バーダリの行為目的説，および，それ以後に展開するダルマ開顕説を予め理解しておく必要がある（片岡 2011a 参照）．apūrva や kārya などは，プラバー

カラ派においては，niyogaとほぼ同義語的に用いられることがあるが，ニュアンスの違いからも明らかなように，それぞれ，異なる出自・歴史的背景を担っている．

21 語と語意の関係は，それを人為（神の欲求によって作られた場合も含む）とするニヤーヤ・ヴァイシェーシカや仏教では，取り決め・合意などを意味するsaṃketa, samayaなどの用語が用いられるが，それを非人為（apauruṣeya）とする文法学やミーマーンサーでは，通常，単に「関係」（saṃbandha）と呼ぶ．そして，その関係を，JSでは「生来的」（autpattika）とし，ŚBhは，それを常住（nitya）とする．あるいは，「関係項－関係－関係項」という双方向的な見方ではなく，「語→語意」という図式で捉える場合には，語の能力（語が語意を理解させる・表示する能力）と呼ぶ場合もある．「能力」という概念はクマーリラにおいて多用される重要な鍵概念である．詳しくは，Kataoka 2011b: II 247–249, n. 204を参照．

能力
|
語　→　語意

22 金沢 1991.

23 詳しくは，片岡 2019を参照．

24 なお，文と文とを合わせた，文を越える単位は，文脈（prakaraṇa）と呼ばれる．

25 文法学派が「無部分の文」（akhaṇḍavākya）を実在とする論者であるのに対して，ミーマーンサー学派は音素［実在］論者（varṇavādin）である．

26 シャバラにおいて準備効果であったsaṃskāraが，クマーリラにおいて想起原因としての潜在印象と読み替えられていく過程について詳しくは，Kataoka 1999aを参照．

27 シャーリカナータは，バッタ派説を「表示されたものの連関」（abhihitānvaya）説と名付け，プラバーカラの「連関したものの表示」（anvitābhidhāna）説との対比を明瞭にする．

28 論題（adhikaraṇa）の一覧が，MK III 冒頭，スートラ順に掲載されている．

29 *Śābarabhāṣya* 思弁篇の和訳として，針貝 1989がある．

30 シャバラ注の文論題については，Kataoka 2020bの批判校訂本がある．

31 また，ジャヤミシュラ注 *Śarkarikā* 出版の基礎となったAdyar写本はĀkṛti, Apoha, Vana, Saṃbandhākṣepaparihāra（39abまで）のみを収めるので文意論は含まれていない．

32 英訳やサンスクリット注に慣れない読者のためには，北川秀則による和訳（北川 1968–71）も存在する．しかし，北川が準拠するAS（G）の英訳・解説を直接に参照すべきである．訳語も含め，あくまでも，参考程度に留めるべきである．

略号表および参照文献

一次資料

Vākyārthamātṛkā

Vam　See PrP.

Arthasaṃgraha

AS（G）　*The Arthasaṁgraha of Laugākṣi Bhāskara.* Ed. A.B. Gajendragadkar and R.D. Karmarkar. Delhi: Motilal Banarsidass, 1984（First edition 1934）.

AS（P） *Artha-Saṃgraha of Laugākṣi Bhāskara [A Manual on Pūrva-Mīmāṃsā]. With an Original Sanskrit Commentary 'Arthāloka' by Paṇḍitarāja Paṭṭābhirāma Śāstrī and Hindi Commentary 'Arthālokalocana' by Dr. Vāchaspati Upādhyāya.* Varanasi-Delhi: Chaukhambha Orientalia, 1990.

Ṛjuvimalā

Ṛju See Bṛh.

（*Adhvaramīmāṃsā-*）*Kutūharavṛtti*

KV *Adhvaramīmāṃsā Kutūharavṛttiḥ.* Ed. Paṭṭābhirāma Śāstrī. 4 parts. Saṃskṛtavidyāpīṭhagranthamālā, No. 6, 7, 8 & 9. Delhi: Śrī-Lālabahāduraśāstri-Rāṣṭriya-Saṃskṛta-Vidyāpīṭham, 1968–74.

Jaiminisūtra

JS See Bṛh.

Jaiminisūtravṛtti（=*Subodhinī*）

JSV *Jaimini Sutra Vritti Named Subodhinī by Rameshwar Suri.* Ed. Parvatīya Nityānanda Śarmā. Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1992.

Prakaraṇapañcikā

PrP（P） *Prakaraṇapañcikā. Pandit,* 1（1866）, 2（1867）, 5（1870–71）.

PrP（C） *Prakaraṇapañcikā nāma Prabhākaramatānusāri-Mīmāṃsādarśanam Mahāmahopādhyāya-Śrī-Śālikanāthamiśra-viracitam.* Ed. Mukunda Śāstrī. Benares: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1904.

PrP（B） *Prakaraṇa Pañcikā of Śalikanātha Miśra with the Nyāya-siddhi.* Ed. A. Subrahmaṇya Śāstrī. Varanasi: Banaras Hindu University, 1961.（特に指定しない場合，本稿での PrP はこのエディションを指す.）

Bṛhatī

Bṛh *Bṛhatī of Prabhākara Miśra with the Ṛjuvimalā Pañcikā of Śālikanātha.* Part I. Ed. S.K. Rāmanātha Śāstrī. Madras: University of Madras, 1934.

Mīmāṃsākoṣa

MK *Mīmāṃsākoṣaḥ.* Ed. Kevalānanda Sarasvatī. 7 parts. Wai: Prājña Pāṭhaśālā Maṇḍala, 1952–66.

Mīmāṃsānyāyaprakāśa

MNP *The Mīmāṁsā-Nyāya-Prakāśa of Āpadeva with an Original Sanskrit Commentary by Paṇḍita A. Chinnaswāmī Śāstrī.* Ed. A.M. Rāmanātha Dīkṣita. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 1981.

Śarkarikā

Śar *Ślokavārttikaṭīkā Śarkarikā of Bhaṭṭaputra-Jayamiśra.* Ed. C. Kunhan Raja. Madras: University of Madras, 1946.

Śābarabhāṣya

ŚBh See Bṛh.

Ślokavārttika

ŚV *Ślokavārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa.* Ed. Swāmī Dvārikadāsa Śāstrī. Varanasi: Tara Publications, 1978.

二次文献

Avasthī, Brahmamitra

1979 *Śālikanāthakṛta Vākyārthamātṛkā-vṛtti, Dīpikā Hindī Vyākhyā sahita.* Dillī: Indu Prakāśan.

Benson, James

2010 *Mīmāṃsānyāyasaṃgraha: A Compendium of the Principles of Mīmāṃsā.* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Bronkhorst, Johannes

2019 *A Śabda Reader. Language in Classical Indian Thought.* New York: Columbia University Press.（Vam I の英訳を含む.）

Cardona, George

1975 "Paraphrase and Sentence Analysis: Some Indian Views." *Journal of Indian Philosophy,* 3, 259–281.

2017 "Mīmāṁsā and Pāṇinian System." *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute,* 94（2013）, 7–110.

Devasthali, G.V.

1959 *Mīmāṃsā*: *The Vākya-śāstra of Ancient India.* Bombay: Booksellers' Publishing Company.（参照文献を記す脚注を排した新版は用いるべきではない.）

Diaconescu, Bogdan

2012 *Debating Verbal Cognition. The Theory of the Principal Qualificand (mukhyaviśeṣya) in Classical Indian Thought.* Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Edgerton, F.

1986 *The Mīmāṃsā Nyāya Prakāśa or Āpadevī.* Delhi: Sri Satguru Publications.

Freschi, Elisa

2012 *Duty, Language and Exegesis in Prābhākara Mīmāṃsā. Including an Edition and Translation of Rāmānujācārya's Tantrarahasya, Śāstraprameyapariccheda.* Leiden-Boston: Brill.

Fujii, Takamichi（藤井 隆道）

1999 「Śālikanātha の anvitābhidhāna 論 ── 想起と意味表示 ── 」,『印度学仏教学研究』47-2, 971（54）–969（56）.

Graheli, Alessandro

2020 *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language.* Alessandro Graheli（ed.）. London-New York-Oxford-New Delhi-Sydney: Bloomsbury Academic.

Harikai, Kunio（針貝 邦生）

1989 「シャーバラバーシュヤ思弁編（Tarkapāda）和訳」,『佐賀医科大学一般教育紀要』8, 27–68.

1990 『古典インド聖典解釈学研究 ── ミーマーンサー学派の釈義・マントラ論 ── 』. 福岡 : 九州大学出版会.

Jhā, Gaṅgānātha

1973–74 *Śābara-Bhāṣya, Translated into English by Ganganatha Jha.* 3 vols. Baroda: Oriental Institute.（First published in 1933.）

Kanazawa, Atsushi（金沢　篤）

1991 「クマーリラの文章義間接表示説 ── 『ブリハット・ティーカー』のものと考えられる半詩節について ── 」,『東洋學報』72-3/4, 53–79.

Kataoka, Kei（片岡　啓）

1995 「「ナラセル」の解釈学 ── 『シャバラ注』における bhāva, kriyā, bhāvanā ── 」,『インド哲学仏教学研究』3, 47–60.

1996 「既知と未知 ── テキスト解釈と世界認識 ── 」,『仏教文化』35, 23–51.

1998 「未知対象想定の一般形式と新得力想定への適用 ── *Śābara-bhāṣya* における arthāpatti と apūrva ── 」,『仏教文化研究論集』2, 28–57.

1999a "The Mīmāṃsā Concept of *Saṃskāra* and the *Saṃskāra* in the Process of Cognizing a Word-meaning – *Pūrva-varṇa-janita-saṃskāra* –." *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies,* 11, 1–24.

1999b 「永遠のダルマと顕在化 ── 祭事教学ミーマーンサーにおける「ダルマ開顕説」再建に向けて ── 」,『インド哲学仏教学研究』6, 3–16.

2000 "Reconstructing the *Dharma-abhivyakti-vāda* in the Mīmāṃsā Tradition." In: Sengaku Mayeda ed., *Japanese Studies on South Asia No. 3. The Way to Liberation – Indological Studies in Japan –*, Vol. I, New Delhi: Manohar, 167–181.

2001 "Scripture, Men and Heaven: Causal Structure in Kumārila's Action-theory of *Bhāvanā*." *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 49-2, 1031–1028.

2004 『古典インドの祭式行為論 :*Śābarabhāṣya* & *Tantravārttika* ad 2.1.1–4 原典校訂・訳注研究』, 東京 : 山喜房佛書林.

2011a 『ミーマーンサー研究序説』, 福岡 : 九州大学出版.

2011b *Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing.* 2 parts. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

2019 「シャーリカナータの文意論」,『南アジア古典学』14, 323–335.

2020a "Śālikanātha on Language Acquisition: A Study of "Vākyārthamātṛkā" II." In: Alessandro Graheli ed., *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language,* Bloomsbury, 278–294.

2020b "A Critical Edition of *Śābarabhāṣya* ad 1.1.24–26: *Vākyādhikaraṇa.*"『東洋文化研究所紀要』（The Memoirs of Institute for Advanced Studies on Asia）177, 368（1）–342（27）.

Kitagawa, Hidenori（北川 秀則）

1968–71 「Arthasaṃgraha 和訳解説 I–III」,『名古屋大学文学部研究論集』48（1968）, 37–62;『名古屋大学文学部二十周年記念論集』（1968）, 69–88;『名古屋大学文学部研究論集』54（1971）, 27–65.

Mīmāṃsaka, Yudhiṣṭhira

1978–93 *Ācārya-śabarasvāmi-viracitam Jaiminīya-mīmāṃsā-bhāṣyam Ārṣamata-vimarśinyā Hindī-vyākhyayā sahitam.* Ed. Yudhiṣṭhiro Mīmāṃsaka. 7 bhāgas.

Bahālgaṙh: Rāmlāl Kapūr Ṭrasṭ, 1987, 1978, 1980, 1984, 1986, 1990, 1993.

Ollett, Andrew

2020 "Śālikanātha's "Introduction" to His "Fundamentals of Sentence Meaning"." In: Alessandro Graheli ed., *The Bloomsbury Research Handbook of Indian Philosophy of Language,* Bloomsbury, 251–277.

Pandurangi, Krishnacharya T.

2004 *Prakaraṇapañcikā of Śālikanātha, with an Exposition in English.* New Delhi: Indian Council of Philosophical Research.

Raja, K. Kunjunni

1977 *Indian Theories of Meaning.* Madras: The Adyar Library and Research Centre. (First edition 1963)

Sarma, Rajendra Nath

1987 *The Vākyārthamātṛkā of Śālikanātha Miśra with his own Vṛtti.* Delhi: Sri Satguru Publications.

1990 *Verbal Knowledge in Prābhākara-Mīmāṁsā.* Delhi: Sri Satguru Publications.

Saxena, Shishir Rajan

2018 *Linguistic and Phenomenological Theories of Verbal Cognition in Mīmāṃsā. A Study of the Arguments in Śālikanātha's Vākyārthamāṭṛkā and the Response in Sucarita's Kāśikāṭīkā.* A doctoral dissertation submitted to the Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, University of Cambridge. (Available online)